

伝統文化の観光資源化と課題

——神楽公演を中心に——

李 良 姫

I はじめに

神楽は、「招魂・鎮魂の神祭に発した神事芸能のことをいう。神座を設けて神々を歓請し、その神前で鎮魂・清め・祓いなどの神事を行ったのが神楽の古い形で、神楽の語源も、神座（かむくら）の約音と解される。今日の神楽は鎮魂の祈祷よりも、その神事に伴う歌舞に主体が移っている」¹⁾としているように神楽は、本来は地域の祭りの際に神社で神に対する奉納として行われていた。奉納の場所が必ずしも神社ではなくて、地域の民家や公民館、集会場などで行われることがあっても、あくまでも地域の祭りであり、地域に根ざし、神に対する奉納の目的で行われていた。しかし、現在では、居住地域に限らず、東京など居住地域とは無縁の地域で公演が行われるようになり、祭りでの神に対する奉納のみではなく、観客に見せるための公演が多くなっている。

天孫降臨の神話の地である宮崎県の高千穂では「高千穂の夜神楽」が国の重要無形民俗文化財に指定されており、神楽が大変盛んな地域である。高千穂の夜神楽は、かつては11月中旬から2月上旬にかけて神楽宿といわれる各地区の民家や公民館などで開催されるものであったが、現在では、高千穂神社の境内に建てられた神楽殿で年中毎日公開されている²⁾。

本論文では、広島県北広島町、安芸高田市、安芸太田町、いわゆる芸北地方を中心に盛んになっている神楽を取り上げ、その現況についてまとめた上で、広島県北広島町田原温泉で開催された「神楽の宴」の開催背景とその経緯について述べる。加えて、観客を対象に行ったアンケート調査および主催者へのインタビューを参考に伝統文化の観光資源化の過程と課題を明らかにする。現在、地方活性化や地方再生が注目を集めている中で伝統文化の観光資源化の課題を把握し、その解決策を見出すことが本論文の目的である。

II 芸北神楽の現況

1. 神楽公演

前述したように、本来は地元の祭りの際に神に奉納していた神楽が現在では、地域や神社を出て、ホールや市民文化センターさらには神楽公演専用の施設で公演されるようになった。さらにこうした施設のみならず、結婚式場などでの大小のイベントやアトラクションとして上演されるようになった。伝統芸能の劇場化、アトラクション化ともいえる現象である。

高千穂で毎日開催されている夜神楽は約1時間の上演で公演の場も神社の境内であり、観客収容数は300人程度である。一方、神楽公演、温浴、宿泊施設を設けている広島県安芸高田市の「神楽門前湯治村」の神楽公演専用施設である「神楽ドーム」は、観客収容数3,000人となっている。1月から12月の年間を通して、金曜日から日曜日の主に週末を中心に神楽公

演が行われる。金曜日と土曜日の夜は「かむくら座」といわれる小規模の施設で夜と昼の部が上演され、3,000人収容できる神楽ドームでは、4月から11月の日曜日の日中に行われる³⁾。「神楽門前湯治村」は、神楽、温浴、宿泊ができることから家族づれが多く、ほぼ毎週神楽鑑賞に訪れている人も多い。こうした芸北の神楽公演は広島県内のみならず、東京公演なども行われ、もはや地域を乖離したものになっている。

2. 神楽共演大会および競演大会

神楽共演大会および競演大会の開催は、各地域の観光協会や新聞社などのマスコミが主催する場合と、実行委員会を組織して行われる場合がある。神楽ポータルサイト神楽の杜のホームページに記載されている2015年の神楽日程表によると、「神楽共演大会」および「神楽競演大会」の名称で広島県内で開催、また予定されている神楽共演大会・競演大会は、広島県世羅町で開催された「新春神楽共演大会」をはじめとして、1月から12月までほぼ毎月どこかの地域で行われている⁴⁾。競演大会に参加すると出演料に加え、優勝すれば賞金が獲得できる。こうした出演料や優勝賞金は神楽団運営資金として活用され、さらに、神楽団のやる気と自負心を向上させ、知名度を高める効果を得ることができる。

3. 奉納としての神楽

神楽の本来の姿であった地域の祭りでの奉納は、現在でもその脈を維持しており、地域の祭りの時期、特に10月の秋祭りや地域の神社の例祭において、従来通り行われている。一方、地元には神楽団がない場合は近隣地域の神楽団や名の知れた神楽団を招聘し、奉納する場合もある。地元の祭りに参加する場合は、神社に属している氏子や地域住民の寄付金を謝礼として受け取るが、他地域の祭りに招聘される場合は、決まった謝礼を受け取ることになる。

Ⅲ 田原温泉「神楽の宴」開催の経緯と現状

1. 中川戸神楽団のスーパー神楽

本論文でアンケート調査を行った田原温泉の「神楽の宴」を企画し、実施したのは田原温泉の元支配人羽原氏であった。羽原氏は、芸北地方北広島町内の中川戸神楽団の団長でスーパー神楽を発案した立役者である。それまでは、全ての神楽団が昔から受け継がれているものを、唯忠実に演じて行くと言う時代であったという。羽原氏は神楽が好きで中川戸神楽団に入団したが、いくら頑張ってもなかなか認めてもらえない、競演大会に出ても良い成績は残せない。そういった状況の中で、まず初めにやるべきことは、中川戸神楽団のファンを増やす事であると考えた。以前のままの神楽を演じ、舞うだけではファンは喜ばない、それならば他の神楽団にないものを作らなければならないと考えた。その結果思いついたのが、歴史上の飛鳥時代の出来事、曾我入鹿の暗殺をテーマにした物語を神楽として取り入れ、板蓋宮（いたぶきのみや）として演じるようになったのである。当時はその斬新さに多くの人が驚いたようだ。そうして中川戸神楽団がもてはやされるようになると、他の神楽団も中川戸神楽団の追随を始め、今では、どこの神楽団も同じようなレベルになっているという。

2. 神楽の宴の開催の背景と経緯

田原温泉は、北広島町内で廃校となった小学校を改造し宿泊施設として運営されていた。2008年6月、田原温泉に入社した羽原氏が、かつて中川戸神楽団に所属し神楽を舞い、神楽団を運営していたことを活用し、同年11月に田原温泉において第1回目の神楽の宴を開催した。当初は田原温泉に男性従業員は彼1人で公演の準備などにも時間がかかったようだ。彼が田原温泉に入社した2008年までは、温泉でのイベントは、カラオケ大会が年1回ある程度で特にイベントで客を集めるという発想はなかった。しかし、羽原氏が入社して3ヶ月で前支配人が退職し、その仕事が彼に回ってきた。当時温泉の年間総売上は約6,000万円だった。社長から売上げを最低でも8,000万円に伸ばして欲しいとの依頼を受けて、イベントを通じて宿泊者を増加させることを考えた結果、神楽の公演を思いついた。各神楽団に出演の協力要請をし、開催に至った。当初は神楽公演に観客を集めるためのファンデータも何もなく羽原氏が以前、中川戸神楽団団長時代にファンに公演案内を送っていた住所を基に案内状を送って、第1回目の神楽の宴が開催された。

会場の収容人数はゆっくり神楽を楽しんでもらうためには、300人が限度であった。また開催するにあたり経費が約100万円かかるということで、そのための入場料を5,000円に設定した。その入場料に見合う内容にするために、他の神楽大会では、味わえない特色を出すことに苦心し、毎年4回の神楽公演を行った。2015年4月の最後の開催まで合計22回の神楽の宴を開催した。毎回の平均観客数は約200人であった。

3. 神楽の宴の現状

神楽の宴の開催を始めたことにより、新規の宿泊客が増加した。また神楽公演を通じ客と従業員が身近な関係になったことも確かである。だが2008年から開催された神楽の宴は、2015年、8月羽原支配人の田原温泉の退職を機に、神楽の宴も中止になった。神楽の宴に参加していた神楽団は羽原氏との関係で協力してくれた部分が多くあった。こうしたことから羽原氏の退職後は、人的にも開催は無理である。羽原氏が中心となって始められた田原温泉神楽の宴の意義は、祭りのな雰囲気ではなく、舞台芸術としての神楽を、神楽を心から愛するファンの人にじっくり楽しんでもらうことであった。羽原氏は、以前から神楽共演大会および競演大会のみではこれ以上観客を伸ばす事は難しいと思い、2010年からは大衆芸能、またコスプレイベント等を取り入れるようになった。羽原氏個人は田原温泉退職後の現在ではコスプレの個人撮影に携わっているが、参加者がかなり伸びているという。

IV 神楽公演見学者アンケート調査分析

1. アンケート概要

アンケート調査は、2014年8月31日に田原温泉で開催された神楽の宴の見学者を対象に行った。アンケート用紙は、神楽弁当と称される弁当と共に配布し帰りに回収した。8月31日開催された第20回神楽の宴には約200名の観客が参加した。その中で、男性が59名、女性が68名の合計146名からアンケートを回収することができた。年代別には、60代以上が最も多い90名、次いで50代が22名、40代が6名、30代・20代が各々5名、10代が4名であった。職業別では、主婦が40名、会社員が36名、無職が30名、自営業が8名、学生が

4名、その他が7名になっている。居住地別では、広島県広島市内68名、その他府中市など広島県が43名、島根県からが8名、岡山県・兵庫県から各々2名、徳島県からが1名であった。

第1表 回答者属性

区分	項目	人数	%	区分	項目	人数	%	区分	項目	人数	%
性別	男性	59	46	年代	60代以上	90	68	地域	広島市内	68	55
	女性	68	54		50代	22	17		広島県	43	35
職業	主婦	40	32		30代	5	4		岡山県	2	2
	会社員	36	29		20代	5	4		兵庫県	2	1
	無職	30	24	10代	4	3	徳島県		1	1	
	自営業	8	6								
	学生	4	3								
	その他	7	6								

2. アンケート概要

神楽公演の参加動機については、複数回答可にし「単独回答」と「複数回答」を区別し、集計を行った結果、単独回答では、「神楽が好きだから」が42名、「温泉と神楽と食事が楽しめるから」が14名、「仲間と一緒に時間を過ごしたいから」が10名、「有名な神楽だから」2名、「日本の伝統文化だから」、「神楽の情熱を感じたいから」、「地元の誇りだから」が各々1名であった。一方、複数回答の集計方式では、「神楽が好きだから」47名、「温泉と神楽と食事が楽しめるから」33名、「日本の伝統文化だから」21名、「仲間と一緒に時間を過ごしたいから」17名、「有名な神楽だから」14名、「温泉が好きだから」9名、「神楽の情熱を感じたいから」8名、「日常生活から離れるために」5名、「地元の誇りだから」2名であった。

第2表 参加動機

項目	単独回答	%	複数回答	%
神楽が好きだから	42	59	47	32
温泉と神楽と食事が楽しめるから	14	20	33	23
有名な神楽だから	10	14	14	10
日本の伝統文化だから	2	3	21	14
神楽の情熱を感じたいから	1	2	8	5
仲間と一緒に時間を過ごしたいから	1	1	17	12
地元の誇りだから	1	1	2	1
日常生活から離れたいから	0	0	5	3

3. 見学回数・年間神楽見学回数

「はじめて」41名、「8回以上」24名、「毎回」24名、「2回」17名、「3回」10名、「5回」9名、「4回」6名、「6回」5名、「7回」5名となっている。今回の田原温泉の神楽の宴を含めて年間で神楽見学回数では、「8回以上」59名、「3回」22名、「1回」12名、「2回」12名、「6回」9名、「7回」7名、「4回」7名、「5回」5名である。

4. 情報元・交通手段・同伴者

神楽の宴の情報源としては、「周りの人（家族／友達／親戚／同僚／地元）」47名、「新聞、雑誌」46名、「インターネット」17名、「はがきなど田原温泉からの案内状」14名、「自然に知った」6名、「旅行会社」6名、「広告塔／垂れ幕」6名、「ラジオ・テレビ」3名となっている。その他、「前回の参加で知る」2名、「温泉の利用」2名、「グランドゴルフに参加」1名となっている。交通手段では、「自家用車」が91名で最も多く「貸し切りバス」49名、「路線バス」1名となっている。誰と一緒に見学に来たのかに関する質問では、「友達／同僚」45名、「家族／親戚」38名、「夫婦／恋人」35名、「一人」16名、「同好会」1名、「町内会」1名となっている。

5. 満足度・再参加意向

もっとも満足したことに対する質問の単独回答では、「神楽」69名、「仲間との交流」6名、「温泉」2名、複数回答では「神楽」119名、「仲間との交流」25名、「温泉」34名、「食事」16名、「従業員の対応」4名であった。一方、もっとも不満足なことでは、「交通手段」17名、「食事」13名、「従業員の対応」5名、「整理券をもらうための席取りの仕方」4名、「温泉」1名、「神楽」1名、その他「うどんやラーメンなど麺類を出して欲しい」、「開演前の整列の声が聞こえない」、「団体と個人の並び方が聞こえなかった」、「開場時間を待たなければならないこと」、「従業員の電話対応など横柄な言葉使い」、「泊まり、バスツアー以外の人は前で見られないこと」、「冷暖房の設備」などがあげられている。再参加意向では、「必ず参加する」41名、「参加する」62名、「状況による」33名、「参加しない」1名、「絶対参加しない」1名となっており、多くの方が再参加の意向を示している。さらに、推薦意向においては「積極的にすすめる」12名、「すすめる」67名、「状況による」47名、「すすめない」3名となっている。

6. 感想・意見

自由記入形式の意見記入欄には様々な意見が出されており、神楽公演に対する関心の高さが窺えた。感想としては、特定の神楽団のファンであり、好きな神楽団の出演を楽しみにしていることや毎回の田原温泉の神楽公演を楽しみにしているなどの感想が多かった。改善点・不満に関することでは、入場順番に対する不満が多かった。宿泊者は宿泊者を優先すべきであるという意見、日帰り参加者は宿泊者を優先することに対する不満などがあった。また、8月の開催を9月にしてほしい意見や食事の量や品目などの不満があった。料金に対してもより安くしてほしいなどがあった。また、見学者のマナーの悪さ、例えば飲酒などに対する指摘もあった。様々な意見はあるものの多くの見学者が神楽公演を楽しみにしていることが分かった。

V 伝統芸能の観光資源化の課題

1. 神楽団の運営維持

神楽団の運営には高額衣装代や移動費、飲食費など費用がかかることから神楽団の維持は安易ではない。神楽団の主な収入は、共演大会・競演大会や祭りでの出演料が主である。そのため神楽団の維持には安定した収入の確保が必要になってくる。

2. 後継者の育成

神楽の衣装は重いもので 20 キロを超えるものもあり、動きも激しくて演技はかなりハードである。そのため神楽を舞う神楽団員の高齢化問題は深刻であり、神楽団員の後継者育成が今後の神楽団維持存続の課題となっている。

3. 観客の確保

中川戸神楽団の団長の経験を持ち、田原温泉の神楽の宴の開催を企画し運営してきた羽原氏は、今では神楽を見る場所も機会も増えており、その結果神楽大会の入場者が減少しているという。激しい競争の中で神楽団と神楽共演大会が生き残れるための持続的な観客の確保が課題になっている。

4. 地域連携

ますます競争が激しくなっていく中で、観客の目はより肥えていく。観客の満足できる神楽を見せるためには神楽関連団体はもちろん地方自治体の協力と地域間の連携が重要である。伝統文化を観光資源として定着させるためには、つねに新たな魅力を発掘し、それを発信していかなければならない。

VI おわりに

神楽団で神楽に参加する神楽団員は神楽を専門にしているのではなく、それぞれの仕事をしながら休みなどを利用し神楽団の活動を行っている。彼らに対するインタビュー調査の結果、神楽が好きで地元に残り地元で仕事をしながら地元の伝統文化を継承しているという人が多い。伝統文化の神楽が若い世代を地元呼び寄せ、新たな雇用機会を与え、地域の観光資源として定着させている効果があることが筆者の数年間の神楽の調査でわかった。一方、神楽団の運営や高齢化による後継者不足、神楽公演の乱立により観客が分散されることで観客の確保も課題になっている。伝統文化維持に必要な後継者不足など同様のことが韓国でも生じている。日韓両国がおかれている伝統文化の観光資源化の課題の解決策を探るために韓国での伝統文化の観光資源化の事例の調査分析をも今後の研究課題にしたい。

注

- 1) 大塚民俗学会 (1994) p 136。
- 2) <http://takachiho-kanko.info/kagura/> 参考。
- 3) <http://www.kaguramonzentoujimura.com/main.html> 参考。
- 4) <http://www.npo-kagura.jp/contents/html/schedule-top.html> 参考。

参考文献

- 大塚民俗学会 (1994) 『【縮小版】日本民俗辞典』、弘文堂。
長澤壮平 (2004) 「岳神楽における上演の場」『宗教研究』、78(3)、pp.761-783。
三村泰臣 (2004) 『広島神楽探訪』、有限会社南々社。
<http://www.npo-kagura.jp/> (神楽ポータルサイト KAGURA の杜 HP) 2015 年 10 月 1 日取得。
<http://www.kaguramonzentoujimura.com> (神楽門前湯治村 HP) 2015 年 10 月 1 日取得。
<http://takachiho-kanko.info/kagura/> (高千穂観光協会 HP) 2015 年 10 月 1 日取得。

【謝辞】

本研究は、科学研究助成事業（「祭りの再生と観光資源化プロセスの日韓比較」、研究代表者李良姫、課題番号 24611031）の助成を受けたものであります。なお、調査にご協力いただいた、羽原博明田原温泉支配人（2015年8月退職）、横田神楽団久保良雄団長には心より感謝申し上げます。また、アンケート及びインタビューにご協力いただいた、関係者の皆さま、ありがとうございました。